



Title	非言語および言語刺激における聴覚性消去現象 (auditory extinction)
Author(s)	田邊, 敬貴
Citation	大阪大学, 1986, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/35128
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 ＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed >大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名・（本籍）	た	な	ひ	た
	田	邇	敬	貴
学位の種類	医	学	博	士
学位記番号	第	7	1	1
		2		号
学位授与の日付	昭	和	61	年
	2	月	27	日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当			
学位論文題目	非言語および言語刺激における聴覚性消去現象 (auditory extinction)			
論文審査委員	(主査)			
	教授	白	石	純三
	(副査)			
	教授	松	永	享
	教授	西	村	健

論文内容の要旨

（目 的）

各々一側耳への刺激であれば正しくどちらで音がしたか答えられるにもかかわらず、両耳が同時に刺激されると一側耳への刺激が知覚されなくなる現象、すなわちBender（1952）により聴覚性消去と名付けられた現象は、臨床知覚検査法に初めて両側同時刺激法を導入したOppenheimにより1885年一側大脳半球病変例で報告されたが、体感覚性および視覚性消去現象に比べるとその報告・検討ははるかに少ない。またこの現象は本来非言語刺激を用いて報告されてきたものであるが、近年では両耳分離能検査（dichotic listening test）において一側耳への語音を正答できない場合も聴覚性消去現象と呼ばれ、その報告は多い。ところが、これらの言語刺激における報告例では非言語刺激における本現象の有無の記載がなく、一方非言語刺激での報告例では言語刺激における本現象の有無が検討されていない。本論文は、非言語および言語刺激における聴覚性消去現象が果たして同一の機構により生ずる否かを検討すると共に、その発現機序につき考察を加えるものである。

（対象および方法）

対象は以下に述べる言語刺激を用いた両耳分離能検査で消去現象を有する右利き大脳損傷者7例であり、その内3名は臨床場面での指スナップ試験でも消去現象を示した。6例は一側半球病変例、1例は脳梁病変例であり、全例顕著な聴力損失や聴力の左右差は認められなかった。

両耳同時刺激の内容として、非言語刺激には臨床的な指スナップ試験のほかに純音バースト（900Hz vs 1000 Hz）を、また言語刺激には単母音（例：“あ” vs “お”）および3音節単語（例：“さくら” vs “たばこ”）を用い、単母音刺激には同母音の組み合わせ（例：“え” vs “え”）をも含めた。両耳

分離能検査は、全例少なくとも3回、日を替えて施行した。

(結果および考按)

指スナップ試験で消去現象を呈した3例は、病変と反対側への純音刺激に対して恒常的な消去現象を示したが、指スナップ試験で消去現象を呈さなかった4例は両耳への純音を正しく認知しえた。

言語刺激を用いた両耳分離能検査では、脳梁後部に腫瘍を有する1例は左耳の消去現象を示し、その他の症例は全例病変と反対側耳への語音の消去現象を呈し、これらの成績は検査を反復しても同様であった。従って全例に消去現象がみられたわけであるが、以下の2つの特記すべき相違点が、非言語刺激でも消去現象を有する症例群(A群)と非言語刺激では消去現象を有さない症例群(B群)との間に認められた。第1の相違点は、言語刺激による両耳分離能検査時の患者の体験の中に見い出された。すなわちA群ではしばしば、消去現象側の耳では全く何も聞こえなかった。もしくは非常に声が小さかったという反応がみられた。これらの反応から、両耳分離能検査で認められる彼らの消去現象は、非言語刺激における消去現象と同様、両耳へ呈示された言語刺激間の音響(acoustic)レベルでの競合により生じているものと考えられる。他方B群ではこのような反応は全くみられず、彼らは両耳で声はよく聞こえていたが、消去側の耳への語音の内容を同定することが困難であった。この事は彼らの消去現象が、両耳に与えられた言語刺激間の、音響レベルでなく言語(linguistic)レベルでの競合により生じていることを示唆しているものと思われる。以上の推測は、次に述べる第2の相違点によって支持されよう。すなわち、非言語刺激において消去現象を呈するA群では、両耳への言語刺激間に言語的競合を有しないと考えられる同母音の組み合わせにおいてさえも消去現象が認められたが、他方非言語刺激において消去現象を有さないB群では、この課題には全問正答し消去現象は一度もみられなかった点である。

以上の結果から、言語刺激による両耳分離能検査でみられる聴覚性消去現象は、少なくとも2つの異なる機序により生じるものと考えられる。1つは両耳へ与えられる言語刺激間の音の知覚(sound perception)過程での競合であり、他方は両耳への言語刺激間での言語的認知(linguistic recognition)過程での競合である。もし厳密にBenderのextinction(消去現象)の定義に従うならば、この言語的認知過程における競合による現象を消去現象と呼ぶことには問題があるが、少なくとも今後言語刺激における聴覚性消去現象を論じる場合、非言語刺激における消去現象の有無を明確にする必要があると考えられる。

(総括)

言語刺激における聴覚性消去現象を大脳損傷患者7例を通して質的側面から検討し、本現象が少なくとも上記の2つの異なる発現機序により生じることを明らかにした。

論文の審査結果の要旨

両耳分離能検査の登場以来、近年言語刺激に対する聴覚性消去現象が注目されている。本論文はこの消去現象が、両耳へ与えられる言語刺激間の音の知覚過程での競合、および言語的認知過程での競合と

いう、少なくとも相異なる2つの機制より生じうることを初めて明らかにしたものであり、極めて、価値ある研究である。今後、本現象を論じる際は、常に本研究結果を念頭に置くべきであろう。